



園芸、今でいうガーデニングが好きです。コロナが始まってから早くも1年が過ぎたのに、まだ、終息する気配がなく、お家時間が増えて、ひたすら庭仕事に励む毎日。夫は市民農園の畑仕事は好きでやっているが、家の庭木などは全く関知せずで、私が脚立に上って梅の木の剪定をしたり、椿を刈り込んだりしている。そんなわけで、金木犀を半分までのこぎりギコギコやろうと文句も言われない。金木犀を小さくしてつるバラをのさばらせたい一心で直径10cmでも一発で倒す。しかし、庭じまいという言葉もあるくらいなので、草花と違って樹木は処分するときに往生する。めったやたらに木は植えてはいけない。って、家の庭木は私が植えこんだものばかりですが。

コロナでなければ外で使ったはずのお金をバラにつぎ込み、この春はすでに5種類1万円以上散財してしまい、あと10日ほどでバラ満開になるだろう広くもないマイガーデン。日当たりが悪いのと水はけがよくないので、芝生らしき所は年々ショボくなるばかり。それでも雑草は所かまわず生えてくるから、昨年の夏はひたすら、草取りに励んだ。今年もまもなく雑草が伸びてくる。いっそのこと全面に砂利でも入れたほうが手入れも簡単なんだろうが、土が地面があるほうが落ち着くというか、夏も涼しいと思う。とにかく身の回りに緑や土がなかったら生きていけへん私なので、マンション暮らしなどは絶対に無理。

雑草という名前の草はない。雑草にも一つ一つ名前がある。名前を覚えると歩くことが楽しくなる。庭に生えてうれしい雑草もある。この本の100種の名前のほとんどは見知っているし、6割くらいは草の名前も言い当てられそう。幼いころ、父に連れられた田んぼや畑でたくさんの草の名前を覚えた。カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、スズメノテッポウ、キュウリグサ…足元の雰囲気までが

思い出される。最近、道端で見かける雑草は、昔はこんなん生えてなかったよなぁと思うものも多い。オオバコに似た背の高いヘラオオバコもここ数年、空き地でよく見るようになり、花がかわいいアカバナユウゲショウ、アメリカフウロ、ナガミヒナゲシもマツバウンランも昔はなかった。「雑草にとってはかわいらしさも武器なのである」うんうん、だから道端で屈み込んだりしてしまう。

雑草のうち、かわいそうな名前ベストスリーは「オオイヌノフグリ」「ヘクソカズラ」「ハキダメギク」と言われる。オオイヌノフグリは早春に土手や道端で咲く水色の小さな花で、今でもとても人気がある。この花を見つけると、風は冷たくともかすかなお日さまのぬくもりが感じられ、同じ水色の春の空を見上げて、ああ、春が来たと思う。変な名前の由来は種の形からきている。オオイヌノフグリは明治期に日本に渡来した帰化植物であるが、今ではすっかり日本の土壌になじみ、春先になくはならぬ草になった。別に日本産のイヌノフグリという植物もちゃんとある。オオイヌノフグリよりも小さな花は目立たず、生息数も減らしているらしい。以前、自然の会のウォーキングで石清水八幡宮の近くの川の石垣で見せてもらったことがある。

ヘクソカズラも好きな雑草だ。フェンスなどに絡みつくチマツチマと小さなユリ形の花も可愛く、艶のある黄土色のうら枯れた秋の種はいつも写真に撮りたくなる。

ハルジオンにヒメジョオン、花も語音も似ているけれど、漢字で書くと春紫苑と姫女苑なので間違えることはない。野原に群れ咲く様子はなかなかきれいだが、どちらも明治期から大正にかけて日本に入ってきた。

図書館の特集コーナーに置いてあって、何気に手に取っただけの本、ただの図鑑ではなく身近な雑草の雑学満載なので、読んでいただけで楽しい。「温室育ち」よりも「雑草のごとく」日本人の美意識がここにもあるのね。

『散歩が楽しくなる 雑草手帳』

稲垣栄洋 東京書籍